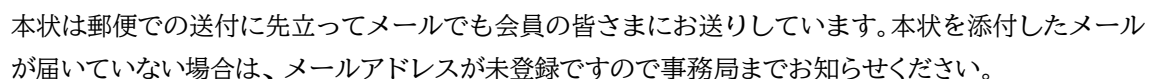


## プログラムと発表要旨

# Programme and Abstracts of Papers

会場： 京都大学 文学部校舎2階第7講義室

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/access/>



# インド思想史学会 第 32 回 (2025 年度) 学術大会のご案内

インド思想史学会会長 赤松明彦

インド思想史学会第 32 回学術大会を下記の通り開催いたします。皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

## 記

開催日 2026 年 1 月 10 日(土)

対面による現地開催を主とし、オンライン(Zoom)を併用します。オンライン参加者は、事前の参加申込が必要です。申込方法はメール連絡または学会ウェブサイトを参照ください。

会 場 京都大学文学部校舎2階第7講義室  
(理事会 11:00 - 11:30 京都大学文学部校舎2階第3演習室)

参加受付 12:30 から 京都大学文学部校舎2階第7講義室前  
参加費: 1,000 円 懇親会費: 一般 5,000円、学生 3,000円 (当日受付)

※ オンラインは会員・非会員とも参加無料。12:30からZoomを開場。早めに入場ください。

## 研究発表者および発表題目

13:00 - 13:50 須藤 龍真 (早稲田大学高等研究所講師)  
「ジャイナ教議論学史におけるヴィディヤーナンディンの位置づけ」

13:50 - 14:40 石井 裕 (拓殖大学非常勤講師)  
「プラティーハーラ・インドウラージャによる dhvani 論批判」

~~~~~ 休憩 ~~~~~

15:10 - 16:00 天野 恭子 (京都大学大学院文学研究科准教授)  
「ダルマーストラの過失リストとブラーフマナの人間供犠リスト:  
Maitrāyaṇī Saṃhitā 4.1.9における『罪のなすりつけ』をもとにした考察」

16:00 - 16:50 張本 研吾 (ナポリ東洋大学研究員)  
Sebastian Nehrdich (東北大学ディスティングイッシュトアシス  
タントプロフェッサー)  
“AI and Indological/Buddhological researches:  
Dharmamitra/Dharmanexus and its Application”

総 会 17:00 - 17:30 引き続き同会場(第7講義室)、同URL(Zoom)で

懇親会 18:00 - 20:00 文系学部校舎1階「ぶんこも」にて

Association for the Study of the History of Indian Thought  
Programme of the 32th Annual Conference

AKAMATSU Akihiko, President

The 32th annual conference of the Association is to be held as follows. We will cordially invite you to the conference.

Date and Time: 10 Jan 2026 (Sat.), from 13:00

Board Meeting: 11:00 — 11:30 (Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Seminar room 3)

Method: Face-to-face meeting/Online meeting by Zoom  
(Those who wish to participate online are asked to pre-register.  
For registration, please consult the follow-up email or our website.  
The conference room and Zoom meeting are open from 12:30)

Venue: Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Lecture room 7

Programme

13:00 — 13:50 SUDO Ryushin (Assistant Professor, Waseda Institute for Advanced Study, Waseda University)  
“Vidyānandin’s Place in the History of Jaina Argumentation Theory”  
[in Japanese]

13:50 — 14:40 ISHII Yutaka (Part-time lecturer, Takushoku University)  
“Pratīhārendurāja’s Critique of the Dhvani Theory”  
[in Japanese]

~~~~~ Break ~~~~~

15:10 — 16:00 AMANO Kyoko (Associate Professor, Graduate School of Letters, Kyoto University)  
“Lists of Offenses in the Dharma Sūtras and Lists of Human Sacrifice Victims in the Brāhmaṇas: A Study Based on ‘the Transference of Sin’ in Maītrāyaṇī Saṃhitā 4.1.9.”  
[in Japanese]

16:00 — 16:50 HARIMOTO Kengo (Research associate, University of Naples “L’Orientale”)  
Sebastian NEHRDICH (Distinguished Assistant Professor, Tohoku University)  
“AI and Indological/Buddhological researches: Dharmamitra/Dharmanexus and its Application”  
[in English]

Plenary Meeting 17:00 — 17:30 (Continued in the same room/Zoom meeting)

Banquet 18:00 — 20:00 (Multipurpose space BUNCOMO)

# ジャイナ教議論学史におけるヴィディヤーナンディンの位置づけ

須藤 龍真

(早稲田大学高等研究所講師)

インド哲学諸派は、哲学的議論を通して、敵対主張がはらむ誤謬を明らかにし、自説の優位性を示した。インド議論学の体系は、古典ニヤーヤのドグマ的な議論学説と仏教論理学派ダルマキールティの還元主義的でミニマルな議論学説を中心として、論理学的な裏付けをもって基礎付けられた。その理論は、後代、ヴェーダーンタ学派やジャイナ教などに批判的に受容され、それぞれに独自の発展を遂げている。とりわけ、ジャイナ教議論学説には、ニヤーヤ学派や仏教の議論学説に対する第三者的な立場からの批判や、議論の構成員・プロセスに関する具体的な言及など、固有の視点からの分析がみられる点に特徴がある。

夙に宇野惇（1973:98）は「論議が成立するための外形的なルールその他を論じた文献に、未だ接する機会を得ないが、ここにその間の事情にいささか触れていると思われる作品がある。（中略）ヴァーディ・デーヴァスーリ作のジャイナ教論理学の綱要書プラマーナ・ナヤ・タットヴァーローカ（*Pramāṇanayatatvāloka*）がこれで、その第八章は「論議」*vāda* を取扱っている」と指摘し、その翻訳を収録する。桂（1998:135）もまた「古代インドの討論が、どのような状況下で、どのようなメンバーによって行われたかを知るための資料はほとんど皆無である」とした上で、「若干の具体的な情報を与えてくれる」資料として同書に言及する。しかしながら、河崎（2014:131）に「ただ、ヒンドゥー教や仏教におけるその種の記述については一定の成果があるのに比べ、ジャイナ教で討論や問答が如何に捉えられていたかは殆ど知られていない。（中略）Devasūri 以前あるいは以後の諸作品における状況は五里霧中である」と指摘されるように、その独自性にも拘らず、ジャイナ教議論学史の包括的研究は未だ不十分といえる。長崎法潤氏の研究で知られるヘーマチャンドラ著 *Pramāṇamīmāṃsā* とともに、これらの著作をジャイナ教議論学史ひいてはインド議論学史の中で正当に評価するためには、その前後に位置づけられるジャイナ教文献に展開される議論学説を丁寧に洗い出す作業が必要であろう。

本発表では、ジャイナ教空衣派のヴィディヤーナンディン（Vidyānandin, ca. 9–10c?）の著作 *Tattvārthaślokaṣāstrī* より、その第1章末部に展開される *Tattvārthādhigamabheda* 箇所の内容とその特色、また思想史的位置づけに関する報告を行う。同書はウマスヴァーティの *Tattvārthādhigamasūtra* に対する注釈という体裁をとるが、当該箇所はその第1章末部に置かれた付論でありながら、約460の詩節とともに詳細な議論学説を展開する。そこからは、先行する学派内外の見解を網羅的に扱いながら、主としてダルマキールティの *Vādanyāya* を批判するアカランカの立場を継承しつつ、発展的な議論学の体系をジャイナ教の理論的枠組みの中に組み入れようとするヴィディヤーナンディンの企図が読み取れる。当該箇所の考察を通して、ヴィディヤーナンディンが *Tattvārthaślokaṣāstrī* で展開する議論学説の思想史上の位置づけについて、先述の論師やプラバーチャンドラなど後代のジャイナ教徒への影響についても射程に入れながら明らかにしたい。

# プラティーハーラ・インドゥラージャによる dhvani 論批判

石井 裕

(拓殖大学非常勤講師)

詩 *kāvya* を考究する学問たる詩学 *alaṅkāraśāstra* は、文法学や論理学とともに伝統的サンスクリット学における基礎教養を形成する学問領域である。その歴史は現代に至るまで約1500年に及び、詩の本質、修辞、美質、欠陥、文体等々の論題をめぐり奥深い議論・考察が繰り広げられてきたが、その最大の精華であり一般にインド古典詩学の定説とされるのが *dhvani*(暗示表出)論である。

*dhvani* 論とは、人が芸術を鑑賞するときに味わう快感 *rasa* — 演劇の領域で育まれたこの美的経験の概念 — を詩の領域においても価値の中心に据え、それを実現する *vyāñjanā* 暗示表出機能という意味伝達機能の存在を独自に主張、作品におけるその働きの分析を批評原理とした詩学説であり、9C後半の詩学者アーナンダヴァルダナにより詩論書 *Dhvanyāloka* (*DhĀ*) において提唱され、インド古典詩学の定説となった。しかしながらこの新学説は登場後そう易々と普及したわけではない。その斬新性に比例するように多くの批判も提出され、定説化するまでには、アビナヴァグプタによる補強(10C末)、マンマタによる旧詩学体系との統合(11C後半)という過程を経る必要があったのである。

ある伝承詩節は諸々の反 *dhvani* 論を総括して十二種と伝えるが、そこに挙げられる反 *dhvani* 論の多くはアーナンダヴァルダナら *dhvani* 論者が自説を立証する過程で予想した諸批判、そしてムクラ・バッタ(10C初)やマヒマ・バッタ(11C中頃)ら *dhvani* 批判を図った詩学者たちの著作の中に実際に見出されるものである。それらが展開する議論を詳らかにすることはインド古典詩学の理論発展史を究明する上で極めて重要であるが、未だ十分になされているとは言えないだろう。総じて *dhvani* 論自体の研究はある程度進んでいるにせよ反 *dhvani* 論についての研究が不足しており、インド国内のサンスクリット学研究ですら手薄、インド学研究では僅少、本邦に限れば皆無に近い。こうした状況を考慮し、本発表では反 *dhvani* 論研究の一環として、「*dhvani*=修辞」説に該当する説を唱えた10C中頃の詩学者プラティーハーラ・インドゥラージャを取り上げる。

プラティーハーラ・インドゥラージャは、修辞中心主義の詩学者ウドバタ(8世紀)の詩論書 *Kāvyaṭīkāśāstra* (*KASS*) に対する注釈書 *Laghuvṛtti* (*LV*) を著わしたが、彼は *LV* において *KASS* 全体の注釈を一通り済ませた後に余論として当時の新説 *dhvani* 論に言及し、「ウドバタが *dhvani* 論に全く触れなかったのはそれが *KASS* の説く修辞論に完全に包括されているためである」としてその解説を試みている。ただし、*LV* は *KASS* の注釈書であるもののウドバタ自身はアーナンダヴァルダナ以前の「*dhvani* 論を知らない」修辞中心主義の詩学者であり、*KASS* 自体に *dhvani* 論批判の意図はありえない。したがって「*dhvani* の事例は全て修辞として説明可能である」というこの主張は、インドゥラージャが独自に見出した *KASS* の原意を超えた密義、*KASS* に事寄せて表明した新説と言うべきものであり、彼が「暗示表出=修辞」説をとる独立した反 *dhvani* 論者と見なされる所以である。

本発表ではこの *LV* における *dhvani* 論批判の内容紹介と分析を通じて彼の「*dhvani*=修辞」説を明らかにすることを中心に、余論として *DhĀ* の作者問題、そして詩学史に名の残るもう一人のインドゥラージャすなわちアビナヴァグプタの師バッタ・インドゥラージャがこの *LV* 著者と同一人物か否かという問題についても若干触れたい。

## ダルマースートラの過失リストとブラーフマナの人間供犠リスト：

Maitrāyaṇī Samhitā 4.1.9 における「罪のなすりつけ」をもとにした考察

天野 恭子

(京都大学大学院文学研究科准教授)

Vasiṣṭha-Dharmasūtra 1.18および20.10に見られる罪人 (*enasvant-*) の列挙は、*sūryābhyudita-*「太陽が昇る時に眠っている者」、*kunakhin-*「爪が見えない者」、*śyāvadanta-*「歯が黒ずんでいる者」、*parivitti-*「弟が先に結婚した兄」、*didhiṣūpati-*「妹が先に結婚した姉」、*vīrahan-*「祭火を消す者/人 (大人) 殺し」等の語を含む。Āpastambha-Śrautasūtra 9.12.11では *abhyudita-*や*parivitta-*を含む類似の列挙が、贖罪法を行うべき者として規定されており、同様の罪の概念を背景としていえると考えられる。

このリストとほぼ同じ人々が、Maitrāyaṇī Samhitā、Kāṭhaka-Samhitā、Taittirīya-Brāhmaṇaの新満月祭の章においても挙げられている (MS 4.1.9, KS 31.7, TB 3.2.8)。上で挙げた罪人のリストの元になる記述であると考えられるが、そこではこれらの人々が順番に次の者に罪をなすりつけてゆくことが述べられる。その他に、*vīrahán-*、*parivittá-*、*didhiṣūpāti-* 等の語を含むものに、Taittirīya-Brāhmaṇa 3.4.1-19の人間供犠のリストがある。人間供犠として記述されるのは、様々なステータスや職業の人々であるが、罪人とは限らない。

このリストはヴァリエーションを含みつつ、ヴェーダのブラーフマナ、シュラウタースートラ、ダルマースートラに一貫して受け継がれているが、言及される文脈の枠組みに変化が見られる。その変化に着目することによって、「罪」(*éna-*) がどのようなものと捉えられてきたかを考察したい。

AI and Indological/Buddhological researches:  
Dharmamitra/Dharmanexus and its Application

Kengo Harimoto (Research associate, University of Naples “L’Orientale”)

Sebastian Nehrdich (Distinguished Assistant Professor, Tohoku University)

Recent advances in AI are transforming many areas of scholarship, and the field of Indology is no exception. In this talk we introduce Dharmamitra, an AI-assisted research environment that provides advanced tools for philological work across the Classical Asian languages: Pāli, Sanskrit, Tibetan, and Chinese. Through components such as MITRA Search, Deep Research, and the DharmaNexus textual database, Dharmamitra supports incomparable large-scale discovery of parallel passages and intertextual relationships across linguistic boundaries.

In the first half of the presentation, we briefly outline what Dharmamitra is, what kinds of data and models it relies on, and how its core tools work together from a technical and user’s perspective.

In the second half, we present a concrete case study illustrating its potential for manuscript research. Our example concerns two folios of Buddhist palm-leaf manuscripts belonging to the oldest layer of the Nepalese manuscript collection. The two folios belong to a group of about a dozen unique specimens written in what may be termed Gilgit–Bamiyan Type I script. They were first reported in 1900, and the two remained unidentified, while the rest were successfully identified and studied.

Using Dharmamitra/DharmaNexus to search across Sanskrit, Tibetan, and Chinese materials, we were able to identify highly plausible textual matches for both fragments. One closely corresponds to part of the text translated into Chinese as T 1335 大吉義呪經, while the other aligns with a section of the Tibetan translation of the Akṣobhyatathāgatavyūha\* (Tohoku 50), corresponding to Chinese translations of T 310 大寶積經, book 6 不動如來會, and T 313 阿閼佛國經. This case demonstrates how AI-assisted tools can significantly accelerate and sharpen philological work on difficult and fragmentary sources.